

陶淵明の詩文に見える「天」——「連雨獨飲」詩の理解のために

三 枝 秀 子

一 はじめに

陶淵明の「連雨獨飲」詩は、酒をこよなく愛した陶淵明の代表作の一つとして、「飲酒二十首」詩と併稱されるべき作品である。しかし、これまでの陶淵明詩研究において、さほど注目されていない印象がある。¹⁾ 数少ない論考の中、山田英雄氏は「陶淵明と飲酒―その特色と意義」において、「連雨獨飲」詩を取り上げ、「獨酌する中で、彼の精神は、現實を離脱し雲上の鶴の如くに、時間と空間を超えて自由に飛翔して、自然と一體化した自己を感得するのである」という。山田氏のこの見解は、頷けるところがある。だが、「時間と空間を超え」とは、一體何を根據に述べているのかを明言していない。それは何故か。詩中に用いられている「天」の檢證が不十分なためではないかと考えた。

「連雨獨飲」詩には二つの「天」が詠まれる。一つは、「重觴忽忘天(觴を重ぬれば忽ち天を忘る)」で、もう一つは「天豈去此哉(天 豈に此を去らんや)」である。「連雨獨飲」詩の二例以外に、陶淵明の詩文には、四二例もの「天」を確認することができる。²⁾ 陶淵明の全作品數一三六からすると、³⁾ この數は決して少なくなく、陶淵明詩を研究するにおいて、

「天」は重要な言葉の一つとして数えることができよう。よって、本稿にて、陶淵明の詩文に見える「天」に關して検討を試み、その理解を通してこの「連雨獨飲」詩を解すこととした。

陶淵明の「天」を検討するにあたり、中國における「天」の概念を理解する必要があるのだが、「天」に纏わる研究は數多く行われていて、それらを一讀しただけでは、直ちに理解することは難しい。その先達の研究成果の内、橋本敬司氏に「阮籍の天と空閒」という論考がある。橋本氏は中國哲學の専門性を基に、阮籍の「詠懷詩」に詠まれる「天」について研究している。この橋本氏の阮籍の「天」に對する研究成果を参考にすれば、陶淵明の「天」について、理解することが可能になるのではないかと、いう光明を見出した。

よって、拙論では、まず、「連雨獨飲」詩のこれまでの理解を示し、その後、橋本氏の論考を参照し、「天」に纏わる理解を深める。次に陶淵明の詩文に見える「天」について検討し、その結果を踏まえ、もう一度最後に、「連雨獨飲」詩の内容について検討する。

それでは、次章にて、陶淵明の「連雨獨飲」詩の全文と、日本および中國におけるこの詩の解釋について示していくこととしたい。

二 「連雨獨飲」詩について

「連雨獨飲」の全文は、以下の通りである。

運生會歸盡 終古謂之然

運生は會かならず盡くるに歸す、終古之を然りと謂ふ

世閒有松喬 於今定何閒

世閒に松喬有らば、今に於て定めて何れの閒にかあらん

故老贈余酒 乃言飲得仙

故老 余に酒を贈り、乃ち言ふ 飲まば仙を得んと

試酌百情遠 重觴忽忘天

試みに酌めば百情遠く、觴を重ぬれば忽ち天を忘る

天豈去此哉 任眞無所先

天 豈に此を去らんや、眞に任せて先んずる所無し

雲鶴有奇翼 八表須臾還

雲鶴 奇翼有り、八表をも須臾にして還る

自我抱茲獨 僂俛四十年

我 茲の獨を抱きてより、僂俛すること四十年

形骸久已化 心在復何言

形骸は久しく已に化するも、心在り 復た何をか言はん

この作品は、題にあるように、「連日雨が降る中、獨り酒を飲む」、その胸の内を述べたものである。全體の意味を捉えるために一海知義氏の譯を以下に示したい。

めぐりゆくひとの命はいつかは盡きる むかしから誰もがみとめて來たことだ 世閒では仙人赤松子・王子喬がいたというが いまその消息をきいた人がはたしてあるか 村の古老が酒をくれて なんとこいつで仙界にゆけるとためしにのむと浮き世をはなれ 盃重ねている中にふと天に昇った心地 天も遠くにあるわけでない 自然にまかせるに越したることなし 雲上の鶴には靈妙の翼 世界のはてをたちまちひとめぐり この孤獨を抱きしめてから つかの間に 四十年 體はとくににおとろえはてたが 心は健在 いうことはない

一海氏は、二つの「天」を、一つは、「天に昇った心地」と譯し、もう一つは「天も遠くに」と譯している。二例とも、「天」は「天」のままにしている。一海氏は語釋において、「忘天」を「忘我無心の境地になる」と注し、さらに『莊子』天地篇に「物を忘れ天を忘る。其の名を己を忘ると爲す。己を忘るるの人、是れをこれ天に入ると謂う」と注釋している。

陶淵明の詩文に關する他の注釋書ではどのようにこの「天」を理解しているのだろうか。大凡次の三つに大別すること

とができる。

① 「天」のままの理解⁸

鈴木虎雄『陶淵明詩解』

さかづきをかさねると、にはかに天をも忘れてしまふ。いや、天といふものもこの酔ひ心地からかけはなれたものではない、

鈴木氏は、字句解にて「忘天」を「天は天地の天なり、天のことさへうち忘れる、況や人間界の事をや」と注を施している。

② 「忘我の境地」としての「天」¹⁰

松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』上¹¹

さらに杯をかさねると、たちまち陶然として忘我の境地になった。いや、仙人の住む天界も、この境地からさほどへだたったものではあるまい。

③ 「天空」であり「忘我の境地」でもある「天」

田部井文雄・上田武『陶淵明集全釋』¹²

(さらに) 杯を重ねるうちに、早くも天空の存在すら忘れて(酔って忘我の境地に至って)しまふ。ぴったり一致した天は、この(忘我の)酔ひ心地から、どうして遠くへだたっていようか。

また、兩氏は語釋において「忘天」を「天空の存在すら忘れる。ここでは、酔って忘我無心の境地に至ること」と注釋し、『莊子』の「天地」篇を載せている。

以上のように、「天」を「天」「忘我の境地」「天空」等、様々に解釋していることが見て取れる。では、中國における理解はどのようであろうか。

まず、古直『陶靖節詩箋』に「莊子天地篇忘乎物忘乎天其名爲忘¹³」と、『莊子』天地篇が引かれている。そして、最近の注釋書である袁行霽『陶淵明集箋注』の「箋注」においても『莊子』天地篇が引かれている。袁氏はこれに加えて、引用文の後に、「此所謂「天」意謂超於物之上而接近自然（「天」とは物を超え自然に近い物）と解している¹⁴」。

紙幅の關係上、解釋の全てを載せることはできないが、日本および中國においては、概ねこのように、『莊子』天地篇を據り所として理解している。

日本および中國における「連雨獨飲」詩に纏わる従來の「天」の解釋を確認した。次に、陶淵明は「天」をどのような物として表現しているのか、陶淵明の詩文に見える「天」について次章にて検討していくことにしたい。

三 陶淵明の「天」についての検討

先に、陶淵明の詩文中において、「天」の用例を都合四四例確認することができると思ふ。それは「天」一文字の場合もあれば、例えば「天命」のように二文字の熟語になっている場合もある。以下、陶淵明の「天」についてその特色を見出していくことにしたい。

陶淵明の「天」を検討するにあたり、「天」の理解には哲學的考察が不可缺であると思ふ。前述の通り橋本氏の論考

を参考にした。その理由は先にも簡単に觸れたが、橋本氏は「天」の概念に関する研究を数多く行い、その成果に基づき、「阮籍の「詠懷詩」を分析しているからである。

まず、橋本氏の「天」に関する研究および、阮籍詩を分析するために用いた三つの分類について次に示したい。

橋本氏は、歴代王朝に見える天觀の變化について、周から魏にかけて徐々に主宰性や絶對性が遞減し、空閒としての把握へと傾いていき、さらに、「天」を自然法則や形象として捉える思想が生まれてきているという。阮籍はまさにこのような潮流の最先端にいた、と氏は考え、よって阮籍テクストを分析した。氏は阮籍の詩を分析する際に、「天」を、(1) 主宰的「天」、(2) 運命的「天」、(3) 空閒と時間的「天」の三種類に分類し行つた。

以上が橋本氏の「天」の理解と、阮籍詩を研究する際に用いた「天」の分類である。

拙論では橋本氏の分類を参考に、陶淵明の「天」を、(1) 主宰的「天」、(2) 運命的「天」、(3) 空閒としての「天」の三種類に大別し見ていくこととする。

(1) 主宰的「天」：統治者に下される「天」の「命」

陶淵明の詩文に見える「天」に、主宰的な存在として詠まれる例を認めることができる。次に見る二例は、天から命が下ることにより王や皇帝の統治者が代わるといふ、政治的な意味合いのものである。

まず、最初に「命子」を検討したい。この作品は、全八〇句に及ぶ大作で、長男が生まれたことを機に詠まれたものであるとされる。詩は、先祖を辿り詠うところから始まり、自身の先祖を堯に結び付け詠み起こし、夏、殷、周と陶一族の歴史を詠う。

「命子」

紛紜戰國 漠漠衰周 紛紜たる戰國、漠漠たる衰周

鳳隱于林 幽人在丘 鳳は林に隠れ、幽人 丘に在り

逸虬遶雲 奔鯨駭流 逸虬 雲を遶り、奔鯨 流を駭かす

天集有漢 眷余啓侯 天は有漢に集まり、余が啓侯を眷みる

ここに引用した部分は作品の第二節目にあたる。前の第一節に續き戰國時代から漢までの陶一族の様子を詠う。この「天は有漢に集まり」は、天の命が漢に下ったこととして詠まれている。古直の注に、『詩經』の大雅の「天監在有命既集（天監下に在り、命有り既に集く）」が引かれていることから、『詩經』に基づく用法であることがわかる。そしてこの用法は、陶淵明よりも少し前の時代の孫楚（？～二九三）の「爲石仲容與孫皓書」に「協建靈符 天命既集（靈符を協建し、天命既に集る）」にも確認することができる。

次に擧げる陶淵明の「讀史述」は、主宰的「天」が命を「革」めるといふ用法である。この作品の序に、「余『史記』を讀み、感ずる所有りてこれを述ぶ」とあり、九首のそれぞれに歴史に残る人物の功績を詠う。「天」の例は、その第一首目にあたる「夷齊」の前半四句に見える。この詩は、伯夷叔齊の故事を詠うもので、夷と齊が首陽山に隠れるに至つたのは、周の武王が天命に順つて殷の紂王を討つたことによるのだと詠われている。

「讀史述 夷齊」

二子讓國 相將海隅 二子 國を讓り、海隅に相將う

天人革命 絕景窮居 天人 命を革め、景を絶ちて窮居す

ここにある「天人革命」は、王瑤の注を始めとし各注釋書に、『易經』革卦の「湯武革命、順乎天而應乎人（湯武命を革めて、天に順ひ人に應ず）」が引かれ、『易經』に準じていることは明らかである。「天」からの「命」により統治者

が「革」わるという、典型的な「天命」の例である。

ここに挙げた陶淵明の二つの用例は、王朝の變革を「天」の「命」が「集」まり、または「革」まるといふものである。これは『詩經』から續く一つの典型ということができ、後の唐に至っても確認することができる。¹⁸ 次の節にて検討する陶淵明の例は、「天」の「命」が、個人にも下される例である。

(2) 運命的「天」：個に下される「天」の「命」と「罰」

① 「天」の「命」

次の作品は、陶淵明の子供たちへの遺言書といわれているものである。¹⁹ その冒頭部分に「天」と「命」が見える。

〔與子儼等疏〕

告儼俛份佚修

天地賦命 生必有死

自古賢聖 誰獨能免

子夏有言曰

死生有命 富貴在天

四友之人 親受音旨

發斯談者

將非窮達不可妄求

壽夭永無外請故耶

儼、俛、份、佚、修に告ぐ

天地の命を賦すや、生あれば必ず死有り

古より賢聖も、誰か獨り能く免れん

子夏の言へる有り、曰く

死生は命に有り、富貴は天に在り

四友の人、親しく音旨を受く

斯の談を發する者

將た窮達は妄りに求む可からず

壽夭は永く外に請ふこと無き故に非ずや

ここに、「命」と「天」がそれぞれ二例ずつ詠まれている。まず一つめは、「天地の命を賦すや、生あれば必ず死有り」、「天と地」により「命」が與えられており、人は「生」まれたからには必ず「死」ぬ運命にあると詠む。そして續いて、「古より賢聖も、誰か獨り能く免れん」、昔から誰にでも等しく同じように定められたものであり、誰一人死なずにすむ者などいない、と詠まれている。ここに見える陶淵明の「天地の命」は、統治者に與えられていた「命」ではなく、人々に普遍的に與えられている「命」のことである。

そして二つめであるが、「子夏の言へる有り曰く」以降は、『論語』顔淵篇の「死生有命 富貴在天」を引用してそのまま詠まれ、人の死生は「命」に、富貴は「天」に定められていると詠まれている。

前節で述べたのは、「主宰」的「天」が統治者に下す「命」であった。だが、それが統治者に限らず、個人にも「天」から「命」が與えられている。その個人に與えられる「命」は、「死生」を定めるといふ「絶對」的なものである。次の「祭程氏妹文」は、陶淵明の實母と繼母（妹の母）の死を「天罰」が「重」なると詠む。これも個人に下る「天」の「罰」としてみることが出来る例である。

②「天」の「罰」

題に「祭程氏妹文」にあるように、程氏に嫁した妹の死を弔う祭文である。この作品は、妹の死から十八カ月が経ち、供物をそなえる所から詠い始められている。續いて妹のいない邸宅や遺児の様子、妹との思い出を詠み、そして次の引用部分へと續く。

「祭程氏妹文」

昔在江陵

重罹天罰

昔、江陵に在りて

重ねて天罰に罹り

兄弟素居 乖隔楚越

兄弟素居し 乖隔すること楚越のごとし

妹の母を亡くし、そして次に、陶淵明は實母を亡くした。そのことを「重ねて天罰に権り」と詠う。⁽²⁰⁾「天罰」とは、元來、天子に下されるものであった。その「天」の罰が、「祭程氏妹文」では、「天子」ではなく、一個人に下されるものとして詠まれている。

以上、「與子儼等疏」及び「祭程氏妹文」の例からは、統治者に下されていた「天命」や「天罰」が一個人に下されていることを確認した。

このように「天」から「命」や「罰」を下された一個人は、天に對してどのように思うのであろうか。次の「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」詩には、「天を怨まない」と詠まれている。

③「天道」を怨まない

この作品は、主簿の龐遵に宛てて詠んだ詩である。青年時(弱冠)から五四歳(六九年)までの数々の不運を樂府(楚調)の形式を用いて詠む。まずはこの作品の全文を見ることとする。

「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」

天道幽且遠 鬼神茫昧然

天道は幽にして且つ遠し、鬼神は茫昧然たり

結髮念善事 僮俛六九年

結髮より善事を念ひ、僮俛たり六九年

弱冠逢世阻 始室喪其偏

弱冠にして世の阻しきに逢ひ、始室にして其の偏を喪ふ

炎火屢焚如 螟蟻恣中田

炎火屢く焚如たり、螟蟻 中田を恣にす

風雨縱橫至 收斂不盈塵

風雨 縱橫に至り、收斂 塵にも盈たず

夏日長抱飢 寒夜無被眠

夏日には長に飢を抱き、寒夜には被無くして眠る

造夕思雞鳴 及晨願鳥遷

夕に造れば雞鳴を思ひ、晨に及べば鳥の遷るを願ふ

在己何怨天 離憂悽目前

己に在り 何ぞ天を怨まん、離憂 目前に悽し

吁嗟身後名 於我若浮煙

吁嗟身後の名、我に於て浮煙の若し

慷慨獨悲歌 鍾期信爲賢

慷慨して獨り悲歌す、鍾期は信に賢なりと爲す

ここに二つの「天」が詠まれている。

一句目に「天道は幽にして且つ遠し」と詠われる。「天道」とは、「四時の循環として規則正しく變化する天の規則性・倫理性であ」り、二句目の「神鬼」と同じく人事を超越したものととして詠われる。この詩は、續けて青年から壯年に至るまでの争亂、妻の死、猛暑・蟲害等の數々の不運が詠まれる。そして、「己に在り何ぞ天を怨まん」のように、これらの不運の原因は自分にあるので、天を怨むものではないと詠む。

さらに、次の「歸去來兮辭」には、「天」の「命」を樂しむと詠まれている。

④「天」の「命」「分」「運」を樂しむ

次の「歸去來兮辭」は、士官に至るまでの經緯と、役人を辭め故郷にまた戻るまでの經緯を、序と併せて詠んだ作品である。次の引用部分は作品の終わりの部分である。

「歸去來兮辭」

懷良辰以孤往

良辰を懷ひて 以て孤り往き

或植杖而耘耔

或は杖を植てて耘耔す

登東皋以舒嘯

東皋に登り 以て舒おもむろに嘯き

臨清流而賦詩

清流に臨みて 詩を賦す

聊乘化以歸盡

聊か化に乗じて以て盡くるに歸し

樂夫天命復奚疑

夫の天命を樂しみて復た奚をか疑はん

晴れた日に田を耕したり丘に登り口笛を吹いたり、清き流れに臨んで詩を詠んだりして過こしながら自然の變化に委ねて時を過こす。このような生活を「天命」として受け入れ、それを「樂」しむのであるならばもはや何も疑うことなどない。

ここでは、田園での日々の暮らしを「天命」として受け入れ樂しもうと詠うたまれている。

次の「自祭文」では自己の一生を振り返りそれを「樂天」と詠うたまれている。

「自祭文」は、自身の死と葬儀の様子から詠いだし、次に生前の日々の様子、そして野邊送りの様子、最後に埋葬される墓の様子までを詠うたんでいる。引用したこの部分は、生前の日々の様子を詠む部分である。

「自祭文」

春秋代謝

有務中園

春秋代謝し、中園に務め有り

載耘載耔

迺育迺繁

載ち耘り載ち耔へば、迺ち育ち迺ち繁る

欣以素牘

和以七弦

欣ぶに素牘を以てし、和むに七弦を以てす

冬曝其日

夏濯其泉

冬には其の日に曝し、夏には其の泉に濯ぐ

勤靡餘勞

心有常閑

勤めては勞を餘すこと靡く、心に常閑有り

樂天委分

以至百年

天を樂しみ分に委ね、以て百年に至る

畑を耕し、讀書をし、音樂を奏で、そして冬は日だまりで日向ぼっこをし、夏は泉で涼むという日常のささやかな生活、それを「天」から賦與された「分」とし、それを受け入れ「樂」しむ、この様にして一生（百年）を終えるに至った、とここに詠まれている。

次の「責子」には「天運」の用例を見ることができる。この作品は、陶淵明の子ども達のことを詠ったものである。

「責子」

白髮被兩鬢 肌膚不復實 白髮 兩鬢を被ひ、肌膚 復た實ならず

雖有五男兒 總不好紙筆 五男兒有りと雖も、總て紙筆を好まず

阿舒已二八 懶惰故無匹 阿舒は已に二八、懶惰 故より匹ひ無し

阿宣行志學 而不愛文術 阿宣は 行くく志學なるに、而も文術を愛さず

雍端年十三 不識六與七 雍と端は 年 十三にして、六と七とを識らず

通子垂九齡 但覓梨與栗 通子は 九齡に垂んとするに、但だ 梨と栗とを覓む

天運苟如此 且進杯中物 天運苟も此くの如くあれば、且く杯中の物を進めん

怠け者の阿舒、勉強嫌いな阿宣、數を間違える雍と端、梨と栗を求める通子。子ども達の様子を見ながら酒を飲み、「天」から與えられた「運」として受け入れ、楽しんでいる様子が見て取れる。

以上、この節をまとめた。

陶淵明の作品では「天」から與えられる「命」を、「分」や「運」とも表現している。「天の命」も「天の分」も「天の運」も全てを受け入れそれを「樂」しむと詠まれていた。

次の「天」の用例は、これまで述べてきた、統治者に下される「天命」でもなく、個人の死生や行き様を定めるもの

でもない。空閒としての「天」である。

(3) 空閒としての「天」

次の陶淵明の「九日閑居」は序と詩からなる。以下に引用するのは詩の全十八句の冒頭から十二句までである。

「九日閑居」

世短意恆多 斯人樂久生

世短くして 意は恆に多し、斯の人 久生を樂ぶ

日月依辰至 舉俗愛其名

日月 辰とよに依つて至るに、俗を舉げて其の名を愛す

露淒暄風息 氣澈天象明

露は淒として暄風息み、氣は澈すみて天象明らかなり

往燕無遺影 來雁有餘聲

往燕遺影無く、來雁餘聲有り

酒能祛百慮 菊爲制頽齡

酒は能く百慮を祛ひ、菊は爲に頽齡を制す

如何蓬廬士 空視時運傾

如何ぞ蓬廬の士、空しく時運の傾くを視るや

人はこの世に在る時間は短いのに、この世に居る間に成し遂げたいと思うことが多い。さらに世の人は、長生きをして樂しみたいと願っている。だが、日月は時によつて移り變わる。それ故に、世の人はみな九月九日の重陽節を好んで行う。冷たい露が降り、温かい風も吹かなくなるこの時分、大氣が澄み、空（天）も晴れわたる。燕は飛んで行きその影もなく、飛來した雁の鳴く聲が響くのが聞こえる。酒は多くの憂いを拂い、菊は年を取るのを止めてくれるという。この草庵の主よ、なぜにむなしく時が過ぎゆくのを見ているのか。

「九日閑居」詩に詠まれる「天」とは、「氣は澈すみて天象明らかなり」のように、澄んだ空氣の秋の空をいう。そして、「往燕遺影無く、來雁餘聲有り」と詠まれるように、この空（天）の中「燕」は飛び去つて行き、飛來した「雁」の鳴

く聲が響く、と詠む。この句に詠まれるように、この空の中には飛ぶ「燕」の姿が「無」く、「雁」の「餘聲」が「有」ることに注目したい。なぜなら、ここに陶淵明と阮籍の「天」の中を飛ぶ鳥に對する認識の違いが見えるからである。

前述した橋本氏の論考では、阮籍「詠懷詩」其の四十九の「高鳥天を摩して飛ぶ」の句の「天」を「空閒」としている。さらに橋本氏は、この「天」と同様の「空閒」である「高所から眺める空閒」には、「天命による拘束から解放たれ、風が吹き大鳥が飛翔する空閒が廣がり、「自由なる自己と無限に廣がる空閒を獲得したことを意味している」ともいう。⁽²⁶⁾

橋本氏の取り上げた阮籍「詠懷詩」其の四十九をもう一度ここで検証すると、「高鳥摩天飛、凌雲共遊嬉（高鳥天を摩して飛び、雲を凌ぎて共に遊嬉す）」とあるように、「天」の中を樂し氣に飛ぶ「鳥」の様子が詠まれている。これに對し、陶淵明の「九日閑居」詩は、「天」の中に飛ぶ鳥の姿を表現していないということになる。

陶淵明の「九日閑居」詩と同じく、陶淵明の「己酉歲九月九日」詩も、秋の清らかな氣が澄みわたり、果てしなく高い空の中に（清氣澄餘滓、杳然天界高）、蟬の鳴く聲が無くなり、群れをなす雁の鳴く聲が雲間から聞こえる（哀蟬無留響、叢雁鳴雲霄）。そして獨り酒を飲んだたのしみ（濁酒且自陶）、この一日を過ごそう（聊以永今朝）、と詠っている。この句の中の「雁」も雲間に「鳴」くだけで、飛ぶ鳥の姿はここに表現されていない。

阮籍と陶淵明詩の「天」と「鳥」の違いは、一つは、阮籍の場合、「天」の中を飛ぶ「鳥」の姿が詠まれている。だが、一方の、陶淵明の場合は「天」の中を飛ぶ鳥ではなく、飛び去った後の風景や鳥の鳴く聲を表現していることにあると考える。さらにもう一つの違いは、阮籍の「詠懷詩」の場合、「天」や「高所から眺める空閒」の中を飛ぶ鳥により「自由なる自己と無限に廣がる空閒」を獲得することが表現されるのに對し、陶淵明の場合、それが「酒」により行われることにあるのではないかと考える。

「己酉歲九月九日」詩と同じく、「連雨獨飲」も「天」と「鳥」と「酒」の三要素が見える。もう一度ここで「連雨獨飲」詩を示したい。

「連雨獨飲」

運生會歸盡 終古謂之然

運生は會ず盡くるに歸す、終古之を然りと謂ふ

世閒有松喬 於今定何閒

世閒に松喬有らば、今に於て定めて何れの閒にかあらん

故老贈余酒 乃言飲得仙

故老 余に酒を贈り、乃ち言ふ 飲まば仙を得んと

試酌百情遠 重觴忽忘天

試みに酌めば百情遠く、觴を重ぬれば忽ち天を忘る

天豈去此哉 任眞無所先

天 豈に此を去らんや、眞に任せて先んずる所無し

雲鶴有奇翼 八表須臾還

雲鶴 奇翼有り、八表をも須臾にして還る

自我抱茲獨 僂俛四十年

我 茲の獨を抱きてより、僂俛すること四十年

形骸久已化 心在復何言

形骸は久しく已に化するも、心在り 復た何をか言はん

先に、一海氏の譯を引いたが、ここでは試譯を示したい。

人というものはこの世に生まれたからには死ぬ定めが古より決まっている。だからこそ、仙人にこれまでであったこともない。昔馴染みが酒をくれた。これを飲めば「仙」人になったような心地になれるという。そこでその酒を飲んでみたら、氣持ちがゆったりと遠くなり、さらに杯を重ねるうちに、ふと「天を忘れる」ような心地になった。「天」とは、このようなものであるのだろう。「眞（自然）」に任せていけばいいのだ。それはあたくも珍しい羽根を持つ「鶴」が、遠く（八表）を一瞬の間に飛び還ってくるようなものである。私はこのようにして、すでに四十年もの歳月が過ぎた。この肉體は年と共に變わっていくけれども、心は變わらずいつもそのままであるのだよ。

この詩の内容を、簡略に理解するならば、「仙を得る」ことができると言われて飲んだ酒は、「天を忘る」ものであった。そしてその「天」は「此」にあり、「眞」に任せさえすればいいのだ、ということになる。この「天を忘る」の「天」は、ここまで論じてきた、「天命」を下す「天」でもなく、壽命を定める「天」でもない。では、この「天」は一體何なのだろうか。その答えは、「雲鶴 奇翼有り、八表をも須臾にして還る」の句にあると考える。

「雲鶴 奇翼有り、八表をも須臾にして還る」の、「鶴」は、遠く（八表）まで飛び行き、そして戻って（還）くると詠まれている。ここに詠まれる「鶴」は、先に見た「九日閑居」詩や「己酉歲九月九日」詩に詠まれる飛び去って行ってしまった「燕」でもなく、聲だけの「雁」でもない。「鶴」は飛び行きそして飛び還ってくるかと詠まれている。

「鶴」が飛ぶ「空閒」とは、無限に広がる空閒であるのだが、「鶴」が「還」ってくるかと詠まれることから、どこかに「空閒」としての限りがあるとも考えられる。その「空閒」を「鶴」は、「須臾」にして飛び「還」る。この「須臾」とは短い「時間」のことである。つまり、「鶴」が飛ぶ空閒や時間には「限り」があるということを表現している。そしてそれは、「連雨獨飲」詩の冒頭にも「運生は會ず盡くるに歸す、終古 之を然りと謂ふ」と「限り」ある命を詠うこととも共通する。

以上をまとめると、「連雨獨飲」詩には、人が生きている一生の間の限られた「空閒」と「時間」の中で得ることのできる自由な境地を「酒」により得ることができること、その境地を「天を忘る」として詩に表現したのではないかと考える。このように考えるならば、「天」とは「空閒」と「時間」と理解することができる。

従來の「天を忘る」に纏わる解釋は、『莊子』天地篇の「其の名を己を忘る」による「忘我」や「自然」の境地が表現されているというものであった。確かにそう解釋することもできる。だが、この詩は題に「連雨獨飲」とあるように、「酒」を「飲」むことにより「時間と空閒を越えて自由に飛翔して、自然と一體化した自己を感得する」ことが表現さ

れていると解すこともできる。そしてこれは、陶淵明独自の表現であると考えている。

四 おわりに

本稿において、陶淵明の「連雨獨飲」詩を理解するために、「天」について検討した。

「連雨獨飲」詩について、冒頭にて取り上げた山田氏の「時間と空間を超えて自由に飛翔して、自然と一體化した自己を感得する」という解釋には頷けるところがあるが、根據に乏しいと感じていた。そこで、橋本氏の論考より、「天」は「時間」と「空間」を表している可能性があることから、陶淵明の詩文に見える「天」を検討し、それを基に「連雨獨飲」詩の「天」について考察した。

その結果、山田氏のいう「時間と空間を超えて自由に飛翔して、自然と一體化した自己」とは、「鶴」が飛ぶ「空間」と「時間」に喩えられる、飲酒により得られる境地であると考えた。

今回は橋本氏の見解に則り、阮籍の「天」に纏わる作品を理解し、それと陶淵明とを比較したにすぎない。阮籍に限らず、他の詩人の詠む「天」と比較し、陶淵明の「天」の特徴をさらに説明する必要がある。それについては今後の課題としたい。

注

(1) 「連雨獨飲」について論じた論考は、山田英雄「陶淵明と飲酒―その特色と意義」(『高知大國文』一四號、一九八三年)、伊藤直哉「『連雨獨飲』その他―陶淵明詩に關するノート」(『櫻美林大學中國文學論叢』一八卷、一九九三年。この論文は後、『笑い』

としての陶淵明』五月書房、二〇〇一年に収録される)がある。

(2) 檢索には堀江忠道『陶淵明詩文綜合索引』彙文堂、一九七六年を使用した。

(3) 作品数については、堀江忠道、前掲注(2)に記載されている作品篇目番號に據った。

(4) 「天」を理解するために、金谷治『中國思想を考える 未來を開く傳統』(中公新書、一九九三年)、溝口雄三他『中國思想文化事典』(東京大學出版會、二〇〇一年)、菅本大二『五十而知天命「小考」』(『中國文化—研究と教育』六一卷、二〇〇三年)、湯淺邦弘『概説中國思想史』(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)等を参照した。

(5) 橋本敬司『阮籍の天と空間』『廣島大學大學院文學研究科論集』六八卷、二〇〇八年。

(6) 一海知義・興膳宏『陶淵明 文心雕龍』筑摩書房、一九六八年、五三〜五四頁。

(7) 金谷治氏はこの引用文を「物を忘れ天を忘れること、それを名づけて忘我というが、忘我の人であつてこそ、天の境地に入つたものといえるのだ。「聖人とはこういう人物のことだよ」と譯している。『莊子』(第二冊)岩波書店、一九九三年、一一六〜一七八頁。さらに、金谷氏の「天」の譯も「天」のままである。

(8) 他、「天」を「天」と解するものとして以下の書がある。下定雅弘『陶淵明と白樂天』(角川選書、二〇一二年)九一〜九三頁。

(9) 鈴木虎雄『陶淵明詩解』平凡社、一九九一年、一四〇頁。(弘文堂書房、一九四八年)

(10) 他、「天」を「忘我の境地」と解するものとして以下の書がある。伊藤氏、前掲注(1)著書一三九〜一四〇頁。

(11) 松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』上 岩波書店、一九九〇年、一二六〜一二八頁。

(12) 田部井文雄・上田武『陶淵明集全釋』明治書院、二〇〇一年、一〇二〜一〇四頁。

(13) 古直『陶靖節詩箋』廣文書局、一九七八年(一九七四年)、五二〜五三頁。

(14) 袁行霽『陶淵明集箋注』中華書局出版、二〇〇三年、一二八頁。なお本稿は當書を底本とした。

(15) 古直、前掲注(13)二五頁では「既」を「已」にしている。『詩經』大雅、大明「天監在下 有命既集(天監下に在り、命有り既に集く)ここに引く『詩經』の書き下し文は斯波六郎『陶淵明詩譯注』(北九州中國書店、一九八一年)一六〇頁、一海氏、前掲注(6)二九頁による。なお石川忠久『詩經』下(明治書院、二〇〇〇年)六五頁では、「天下を監在し、命既に集く有り」と訓讀している。

(16) 『文選』卷四三所收。

(17) 王瑤『陶淵明集』人民文學出版社、一九八三年(一九五六年第一版)、一一七頁。遠欽立『陶淵明集』中華書局、一九八七年、

- 一八〇頁。袁行霽、前掲注(14)五一四頁。松枝茂夫・和田武司、前掲注(11)下、一九六頁。
- (18) 例えば、唐の張九齡の「奉和聖製次成皋先聖擒建德之所」詩に「天命誠有集」とある。
- (19) 松枝茂夫・和田武司、前掲注(11)下、二二二頁。
- (20) 松枝茂夫・和田武司、前掲注(11)下、二二三頁には妹の母を「繼母」としている。また、遼欽立、前掲注(17)一九二〜一九三頁、袁行霽、前掲注(14)五四四〜五四七頁にも「庶母」とある。しかし、一海氏、前掲注(6)一九五頁には「同じ母から生まれた子」とし、異母であることを一説としている。
- (21) 橋本敬司、前掲注(5)二〜三頁に、「賞罰を下す天、主宰者である天」と「天子である皇帝との間でのみ天人感應が起こる」ものであったという。
- (22) 松枝茂夫・和田武司、前掲注(11)上、一一六頁。
- (23) 橋本氏の論考に、「春秋戰國時代に説かれる「天道」の意味は、四時の循環として規則正しく變化する天の規則性・倫理性である」という。前掲注(5)二頁。袁行霽氏は「天道」を「天理」という。前掲注(14)一一二頁。
- (24) この「天命を樂しむ」については、三枝秀子『たのしみを詠う陶淵明』汲古書院、二〇〇五年、一三九頁を参照。(陶淵明の詩文に見える「快樂」表現について―「樂天」をめぐって―『大東文化大學漢學會誌』四一號、二〇〇二年)
- (25) 「分」を「樂」しむについて、三枝秀子、前掲注(24)一三六頁を参照。
- (26) 橋本敬司、前掲注(5)七頁。
- (27) 橋本敬司、前掲注(5)九〜十二頁。
- (28) 伊藤直哉、前掲注(1)一四〇〜一四二頁にて氏は「還」について検討されている。氏は「還」には「めぐる、歸る」の「兩義性」があり、それは「仙界をめぐる、そして歸還する」という「二重の意味を極めて簡潔に表現しえている」という。